

この列車は上野・水戸間ノンストップなので、新聞を読んで景色を眺めながらウツラウツラしている内に水戸に着いてしまった。

いわき着は12時07分。駅の周りを探索の後、駅前のビルに入って昼食。人口35万人の大都市の中心駅だけあって、駅前風景は東京近郊の大きな駅とあまり変わらない。1966年に平市・磐城市・常磐市・勿来市・内郷市と周辺の9町村の合併によって「いわき市」が誕生し、「平」という駅名が「いわき」と変わった。平駅は国鉄の主要拠点駅のひとつで、甲府・小諸・高崎などと同様に24時間眠らない駅だった。北側に磐城平城跡の山を背負い、東西にレールを走らせる駅で、地図で見るととても安定感がある。個人的には昔の「平」の方が名前の響きが良くて好きだ。

磐越東線は**いわき**発13時13分郡山行、二両編成のディーゼルカー。(右写真)常磐線に沿って水戸方面にしばらく走った後で、右に大きくカーブして真北に向かう。水田と麦畑が混じった斑模様の中を走り、好間川など夏井川の支流をいくつか跨いで、夏井川の本流に接近したところに最初の停車駅**赤井**がある。田に降りる鷺の群れが白く鮮やか。駅のすぐ隣まで住居が並んでいて生活の臭いがする駅だ。西側の山中に関伽井嶽常福寺があるが、これが地名の起源と繋がっているのかもしれない。低山の山肌の緑の濃さが美しい。夏井川と並走して山裾を撫でるように走り少しずつ山間に入るようになる。



小川郷、木造で瓦屋根の昔ながらの駅舎。ここは海拔30mほどの高さで、いわき駅から16m登ってきたことになる。駅の南側の支流の小玉川との合流地点で夏井川は大きく蛇行している。合流する小玉川の上流の山中には小玉ダムがあることを合わせて考えて見ると、二つの川が過去の地形の変化に大きく関わってきた道のみを感じる。

小川郷を出るとすぐに夏井川を渡り、今度は左岸を北西に向かって走るようになる。海拔200mほどの山が徐々に線路に近づいてくる内に、400~500mほどの山に挟まれて走るようになってきた。ディーゼルカーの轟音が急勾配を知らせてくれた。地形図の表示を見ると、流域の農地で海拔40m前後になってきて、夏井川の水面で見ても35, 6mになってきた。

川の流れに迫る山をいくつかのトンネルで交わすようになり、トンネルを抜けるたびに夏井川の水の煌めきと谷間の野草の輝きが交互に登場する。川の流れに合わせて細かな蛇行を繰り返しながら何度か渡岸を繰り返すと、夏井川は花崗岩の岩場を流れるようになってくる。夏井川第一発電所を右手に見やり、程なくして**江田**駅に到着。周囲の山は500m~600mの高さになり川面は海拔127m、線路がある所は海拔140mを越える。駅前のお店の看板に「背戸峨廊(せとがろう)入口」と書いてあるので溪谷探勝路があるようだ。地形図を見ると、駅周辺にある地名がいくつか気になった、塩田・釜ノ平・香後、トッカケの滝。

両岸から迫る山が段々高くなってきた。時折ディーゼルカーの窓が木の枝先を擦る音がある。緑と水と岩の色、そして誰にも採られずに伸びきったワラビの群れ。

地形の変化に合わせて、右岸に渡り左岸に渡り、トンネルを抜けて、を繰り返すと**川前**駅に入る。このあたりまで来るともう駅の周辺にしか人里が存在しない。駅の前は夏井川でまさしく「川前」だし、少し下ったところにあるやや広い河原は「前川原」、地名もわかりやすい。駅前は海拔280mを越えた。

地形図に記されている高度を見ると、川前駅を出て次の夏井駅までの間で一気に海拔400mを越える。**夏井**駅は海拔425m、比較的広めの川幅で光も多く入る明るい集落になっている。水田も広がり畑も多い、落ち着いた暮らしぶりを感じさせる家並み。駅構内の桜の木にサクランボの小さな実が沢山下がっ



て光に輝いていた。

さらに北西方向に進んで行き、少しずつ北に向かってカーブをし始めると谷間が広くなり、**小野新町**(おのにいまち)。いわき駅を出てから、水や川に関係がある駅名(地名)ばかりが続いたが、ここへきて水と縁が切れた駅名になった。「おのしんまち」と読まず「おのにいまち」と読むのは何故だろう。

坂上田村麻呂の東征の後、救民撫育使としてこの地を治めた小野篁の名にちなみ「小野郷」の地名が付いたが、それ以前は七里沢と呼ばれていたらしい。また、江戸時代に小野村と仁井町が存在し、これが合体して小野仁井町村となり、何時の日か小野新町村と変り、明治時代に周辺の町村の合併で小野新町が誕生したという経緯のようだ。現在は田村郡小野町の一部となっている。地形図を見ると、小野町と田村市の境界あたり（田村市滝根町）に「仁井田前」という集落があるが、これが当時の地名の名残なのかもしれない。

停車時間の中で駅前風景を眺め回すと、材木屋と小野小町のイラストが目立つ。小野篁とこの地の長者の娘との間に生まれたのが小野小町で、商品価値が高い娘の方が1200年にわたって利用されているという感じがする。

小野新町を出て北上の後、500m余の山をトンネルで抜けると再び夏井川の本流に沿うようになるが、磐越東線はやがて東の山中に入る本流を離れて支流の梵天川に沿うようになる。また、線路と並走してきた磐城街道は西に離れていき、代わりに新町街道（にいまちかいどう）が並走するようになる。夏井川と梵天川の流れの間にあるのが**神俣**（かんまた）の集落。海拔450m前後の高さ、何か気になる地名ではあるが事前の調べでは何もわからなかった。駅前に風月堂という店がどんと構えているが、どうやらお菓子屋さんではなく衣類と雑貨の店のようだった。水田に映る山と空と雲が車窓を走り、いかにもこの季節らしい景色に心和む。

しばらくこの風景を楽しんでいると、程なくして**菅谷**駅に到着。駅周辺は海拔462m、東側には入水鍾乳洞やあぶくま洞があるゴツゴツした山、西側には円やかな山容ではあるが海拔600mを越える山と、その奥に連なる800mの山脈。間に広がる平地には光り輝く水田。駅間に広がる平地の北端で西から流れてきた牧野川が旅の友になり、流れを下るようになった。（右写真：車窓のキャンパス・・・大滝根山遠望）



菅谷駅を出ると、これまでの北北西から北に進路を変える。再び左に緩やかなカーブをとると、右から不自然に道路が合流してきて**大越**（おおごえ）駅になる。この合流するように寄り添ってくる道路は、国土地理院の地図上では鉄道線路が記されている。2000年に廃線になった住友セメント田村工場への引込み線の名残である。最盛期には住友セメントの他に駅前に片倉チッカリンの工場もあり、旅客輸送よりも貨物列車の方が大変な駅だったようだ。地形図をじっくりと眺めてみると、引込み線は東側の山に向かって走っており、引込線の終点付近には金山平という地名、その奥の721mの山の名が水晶山、長い鉾山の歴史を感じさせる駅。

磐城常葉まで来ると海拔419mになり、僅かずつ下りに入っていることがわかる。やがて並走する牧野川は大滝根川に合流し、ディーゼルカーは**船引**（ふねひき）駅に入る。山中の都会、驚くような立派な駅舎、駅前には田村市役所、駅の反対側には大きなウェディングプラザ。日本中が高齢化し、非婚率が高まる中で、地方の小都市で結婚式場ビジネスが成り立つのだろうかと思わず心配になった。

この辺り、田村市は坂上田村麻呂由来の伝説・伝承が数多く残されている。蝦夷征伐の折、傷ついた兵士を船で引いて運んだことが船引の由来になっている。二つ前の駅大越は、田村麻呂が進軍に切り声を発したことが由来とされているが、素人の目で見ても「やや軽すぎる言い伝え」のような気がする。北西又は北北西に走ってきた磐越東線が、最北地点で左に大きくカーブして南行して**要田**（かなめだ）駅に入る。家々の屋根の河原が光って見えるということは、立派な屋根の家が多いということ、すなわち裕福な集落に違いない。往古、渡来人が米作りを伝授したのがこの地だという話を聞いたことがある。今度は阿武隈川の支流の八島川が並走するようになり、海拔364mまで下ってきたので、旅も後半戦に入っていることを示している。

南西に下って行き、蛇行する八島川に囲まれるような町が**三春**（みはる）。梅・桃・桜の花が同時に咲いて三つの春がそろってやってくるので三春という地名になったというもっともらしい説があるが、南北朝時代の文献に「御春」という地名が記されているので、後年当て字で「三春」となったと考えられる。地形図を眺めてみると六升蒔・持合畑・鶴蒔田・四合田など、農業との関係が深そうな地名が並び、わ

くわくしてくるが、一方新たに宅地開発したと思われる「八島台」という無味乾燥な地名もある。この辺は郡山市のベッドタウンなのかもしれない。駅前はまだ海拔 300m を切ってしまった。ディーゼルカーの響きは明らかに下り坂を走っている音に変わってきて、再び大きめにカーブを切り南西に進むと、遠望を遮るものはなくなり並走する川の名も桜川に変わった。

舞木（もうぎ）まで来ると、もう住宅地の方が多くなり、都会が近づいた感じがしてくる。1914 年に開通した当初は「もうき」と読んだが、1950 年に「もうぎ」と改称したようだが、その理由はわからない。それよりも、「舞木（もうぎ）」の由来の方が気になる。

阿武隈川の鉄橋を渡ると、行く手に大きなビルも目立つ郡山の町並みが見えてきた。阿武隈川の水面は海拔 215m、日東紡績の工場の脇を通して卸売市場の西側を抜けて逢瀬川を渡れば終着駅の**郡山**。

この旅はこれにて終了。

一休みの後郡山の町を散策して、夕方の新幹線で帰宅。特急で行き新幹線で帰るという豪華な日帰りの旅となった。

以上

磐越東線各駅の海拔標高（m）

駅名	郡山	舞木	三春	要田	船引	磐城常葉	大越	菅谷	神俣	小野新町	夏井	川前	江田	小川郷	赤井	いわき
海拔 m	227	245	294	364	409	419	436	461	446	429	425	285	142	30.9	13.7	10.5

*データは国土地理院 web より・・・各駅の「駅記号の中央部の高さ」100m以上は小数点以下四捨五入